# 大学生の罪責感と恥の感情について

B33116　高地隆行

1　定義

精神分析事典(2014)による定義では、罪責感とは自分が犯した行為や心に浮かぶ考えについて自分を責めたりくやんだりする情動、恥とは対人場面での体験や内省の結果生じる自己価値観の低下を伴う心の痛みであるとされており、分かりやすい。

2　先行研究

1）キリスト教や文化人類学上の研究；聖書やベネディクトの「菊と刀」に記されている。「菊と刀」では、日本を他人の目を気にする「恥の文化」と述べられている。

2）罪責感と恥の類似点と相違点；Lewis,Tangney らにより研究された。罪責感は謝罪・償いへの欲求、恥は逃避への欲求という動機的側面の大きな違いがある。

3）罪責感と恥の機能；罪責感は社会的制御機能として社会の規範を今後は遵守するつもりであることを他者に伝達するものであり、恥は行動制御機能として批判的他者の目から逃避する行動に駆り立てるものである。（久崎）また向社会的行動を罪責感は促進、恥は抑制する。（有光）一方罪責感と恥の両傾向とも向社会的行動と正の相関を示したという調査結果もある。（菊地・有光）

4）罪責感と恥の発達的変化、特に青年期における特徴；罪責感及び恥は、社会的基準や目標を内在化しそれらに沿って自己を評価することが可能になる２才半以降に出現し始める。青年期においては罪責感も恥も性差が明確になり、女性は男性よりも強くなる。（Tangney&Dearing）

5）性格特性との関係；内向的な人は外向的な人に比べ罪責感や恥の感情が強い。罪責感の生起には共感性の高さが関係し、恥の感情は他者評価や露呈が関係する。（岡田）

6）罪責感喚起状況の構造；有光は日本人青年が罪悪感を喚起される状況から４因子（F1 他傷、F2 他者配慮不足、F3 利己的行動、F4 他者への負い目）を抽出し、いずれも女性の方が男性より得点が高いことを報告した。

3　研究目的

目的１；大学生における罪責感と恥の感情の相関を調べる。目的２；大学生の場合の性差を調べる。
目的３；大学生における罪責感喚起状況について調べる。の３つを目的とした。

4　調査方法

菊池・有光の自己意識的感情尺度（KA－jikokan－12　シナリオ版）を改編した質問紙を用いて、大学生 143 人にアンケート調査を行った。完全解答は男性 36 人、女性 99 人から得られた。罪責感と恥のそれぞれで得点を合計しその相関関係を調べた。また罪責感喚起状況における４因子ごとの得点を算出した。さらにそれらの男女差について調べた。

5　調査の結果

結果１；平均得点は罪責感の方が恥よりも高い。罪責感と恥の強さは非常に強い相関関係にある。(表１)男女別においても同様であった。（表２）（相関分析；相関係数は男女計 0.767,男性 0.783,女性 0.714）結果２；罪責感も恥も男性より女性の方が強い。（t 検定）（表 3，4）結果３；罪責感喚起状況の４因子分類によると、男性は F1 他傷、女性は F3 利己的行動が最も得点が高い因子であった。F2 他者配慮不足は男女共若干得点が低かった。F1 他傷、F2 他者配慮不足には性差がなく、F3 利己的行動、F4 他者への負い目は女性の方が男性よりも高い因子であった。（表 5，6）（分散分析；F3:F(1,140)=13.56,p<.001　　F4:F(1,141)=15.64,p<.001）調査結果は全て先行研究の結果と一致した。

表１　学生全員の罪責感と恥の強さの相関

| | 恥 |
|---|---|
| 罪責感 | 0.767*** |

*;p<.05,　**; p<.01,　***; p<.001 (n=135)

表２　男女別の罪責感と恥の強さの相関

| 男性 | | 女性 | |
|---|---|---|---|
| | 恥 | | 恥 |
| 罪責感 | 0.783*** | 罪責感 | 0.714*** |

*; p <.05,**;p<.01,***; p<0.001(n=36)　　*;p<.05,**;p<.01 ,***p<0.001(n=99)

表３　罪責感の男女別平均得点と標準偏差

| | 人数 | 平均得点 | 標準偏差 |
|---|---|---|---|
| 男性 | 36 | 3.9 | 0.58 |
| 女性 | 99 | 4.2 | 0.56 |

t (141)＝－3.32　p<.001

表４　恥の男女別平均得点と標準偏差

| | 人数 | 平均得点 | 標準偏差 |
|---|---|---|---|
| 男性 | 36 | 3.5 | 0.70 |
| 女性 | 99 | 3.9 | 0.61 |

t（141）＝－3.46　p<.001

表５　男女別の F3 利己的行動の平均得点と標準偏差

| | 人数 | 平均 | 標準偏差 |
|---|---|---|---|
| 男 | 36 | 3.8 | 1.18 |
| 女 | 99 | 4.6 | 0.96 |

F(1,140) =13.56,　p<.01

表６　男女別の F4 他者への負い目の平均得点と標準偏差

| | 人数 | 平均 | 標準偏差 |
|---|---|---|---|
| 男 | 36 | 3.5 | 1.11 |
| 女 | 99 | 4.2 | 0.80 |

F(1,141)=15,64,　p<.01

6　考察

目的１は結果１により確認された。久崎は先行研究で、罪責感と恥は強い相関関係にあると述べているが、今回の調査の結果、非常に強い相関関係が認められた。罪責感と恥は類似した感情であるが、近年別個に機能していることが見出され、別個の情動として研究されるようになってきた。(久崎) そしてこの２つの情動は強い正の相関関係にあるといえる。目的２は結果２により確認された。種々の先行研究により、青年期では男女の発達的変化、脳の構造的機能的違い、ホルモンの違いなどにより、罪責感と恥の性差が明確になり、女性が男性よりも強くなると言われている。目的３は結果３により確認された。有光の罪責感喚起状況の 4 因子分類による F1 他傷と F2 他者配慮不足には性差は認められず、F3 利己的行動と F4 他者への負い目には性差がみられた。これは、女性が一般的に反社会的行動に対して過敏であり潔癖であること（F3）や、他者の利益を傷つけたことへの後悔、利他行為を受けたことへの申し訳なさを感じやすいこと（F4）が要因の１つと考えられる。統計的有意差はなかったが、F１,F2 も女性が男性よりも得点は高かった。また F2 他者配慮不足は男女共若干得点が低い傾向にあった。これは現代社会において核家族が多く、高齢者や障害者など社会的弱者と接する機会が少ないまま成長し、他者配慮不足が罪責感を喚起する要因となりにくい状況が関係していることが考えられる。以上の結果１～３のすべてが、先行研究の結果と一致した。

7　今後の展望

今日の日本人青年は多くの問題行動や病理反応を示しているが、罪責感や恥に関する研究の発展により、罪責感と恥が青年の向社会的行動の発動や行動修正に適切に働く可能性を有意義に活かしていくことが望まれる。

8　参考文献

新井康允　1994　ここまでわかった！女の脳・男の脳　性差をめぐる最新報告
ブルーバックス　B－1005　講談社
有光興記　2002 日本人青年の罪悪感喚起状況の構造　The Japanese Journal of Psychology 2002, Vol.73,No.2,148－156
有光興記・菊池章夫編著　2009　自己意識的感情の心理学　北大路書房
薊理津子　2008　恥と罪悪感の研究の動向　The Japanese Journal of Research on Emotions 2008,Vol,16,No1,49－64
Benedict.R 角田安正訳　2015　菊と刀　光文社
久崎孝浩　2002　恥および罪悪感とは何か―その定義、機能、発達とは― Kyushu University Research 2002, Vol.3,69－76
久崎孝浩　2006　向社会的行動に対する恥・罪悪感の機能　VISIO　No.35 1－15.　2006
菊池章夫　有光興記　2006 新しい自己意識的的感情尺度の開発　パーソナリティ研究　2006　第 14 巻　第２号　137－148
成田健一・寺崎正治・新浜邦夫　1990　羞恥感情を引き起こす状況の構造―多変量解析を用いて―関西学院大学人文論究、40、73－92
岡田顕宏　2007　罪と恥の感情が生起する状況の個人差―個人の内向―外向および共感性との関係について―　日心第 71 回大会
大橋渉　2016　統計を知らない人のための SAS 入門―Ver.9.3 対応版―オーム社
田原佐和子 2013　青年期における恥及び罪悪感感情が精神的健康に及ぼす影響―自尊感情・自己開示との関連から―　目白大学大学院　平成 25 年度　終了論文概要
高森　淳一　2004　共感との関連からみた罪悪感：発達的観点から　天理大学カウンセリング紀要　第１巻　65－93　2004
田中冨久子　2008　女の脳・男の脳　NHK ブックス［821］日本放送出版協会